

さかもと

あゝあゝ  
体験手帖

歴史編其之巻

西南戦争と坂本。そして近代化へ―。

製作・編集 NPO SSP (さかもと再生プロジェクト)

この冊子は、平成25年度第10回九州ろうきんNPO助成の補助によって作成されました。



悠久の時間が流れる

# さかもと

坂本町を体験しましょう。  
歴史のダイナミズムを体感できます。

坂本町は、山と川の里です。

長い間、豊かな地域でした。

山は燃料としての薪を生み出し、

川は最適の輸送手段です。

川は電気をつくりだし、

山林の樹木は製紙の材料になりました。

熊本県で最初の近代工場は製紙業で、

それは坂本にできました。

自然の力を最大限に生かしてきた場所、  
それが坂本町です。



## 交通アクセス access

### 【自動車】

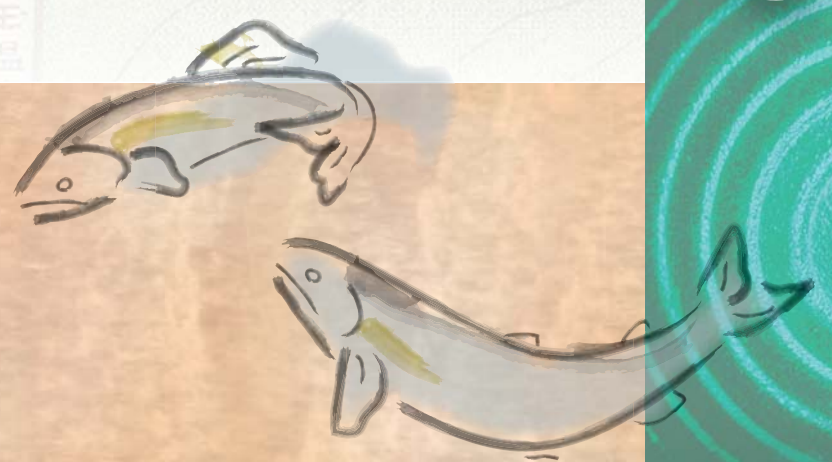
八代I.Cまで（九州自動車道）  
・福岡インター（約120分）  
・熊本インター（約40分）  
・鹿児島インター（約120分）  
八代I.CからJR肥薩線段駅まで  
車で約10分（p17-18 探索地図  
もご参考ください）

### 【新幹線】

新八代駅までの所要時間  
・博多駅（約52分）  
・熊本駅（約12分）  
・鹿児島中央駅（約34分）

### 【飛行機】

阿蘇くまもと空港より  
シャトルバスで、  
新八代駅まで約50分





# 輸送手段としての球磨川

## 西郷さん、球磨川を下る

明治十年(二八七六年)二月二日、西郷隆盛は桐野利秋・村田新八をしたがえ、人吉から舟に乗り萩原に上陸、翌二十日に川尻に到着しました。いわゆる西南戦争の勃発です。

海岸の薩摩街道を進んだのではないかと思っていた人もいないと思いますが、そうではありません。先陣は、水俣↓田浦↓佐敷↓日奈久↓八代の海岸線のルート(薩摩街道)を進みました。

しかし、西郷の本隊は鹿児島県の大口(薩摩川内市)から山を越えて人吉に入り、人吉で一休みしたあと二気に球磨川を下り、熊本に向かったのです。

西郷軍の本体の球磨川下りです。川沿いに住んでいる人たちは、びつくりしたと思います。実際、西郷軍はかなりの数の川舟や筏を利用したはずですよ。

球磨川には、たくさん舟がありました。舟を自由にあやつれる多くの舟頭さんや筏師さんがいました。川も整備されていました。だからこそ、西郷軍は球磨川を利用できたのです。そのことを西郷軍は知っていたということになります。球磨川の水運についての情報もなしに軍事行動はおこせません。球磨川の輸送力は鹿児島でも有名になっていたのです。川舟造り専門の木工さんも坂本古田地区(巻末地区)にいました。



Français : Takamori Saig? et ses officiers, a la Rebellion de Satsuma.

日本語: 西郷隆盛とその将兵たち、西南戦争にて  
出典: 1877年 French newsmagazine Le Monde Illustré

## 覚書 『薩軍の八代急襲』

薩軍は田原方面での戦闘の激化に伴って兵力が不足してきたため、桐野の命で淵辺群平・別府晋介・辺見十郎太らが鹿児島に戻って新たな兵力の徴集にあたった。3月25日、26日の両日で1500名ほどの徴兵したものの、官軍が八代に上陸し、宇土から川尻へと迫っていたため、この兵力は熊本にいる薩軍との合流ができなかった。よって、この部隊は人吉から下って、八代から熊本へ進軍中の官軍を背後から攻撃し、退路を断って孤立させるという作戦のもとで行動することになった。

4月4日、人吉から球磨川に沿い、或いは舟で下って八代南郊に出た薩軍は、まず坂本村の官軍を攻撃して敗走させたのを皮切りとして、5、6日と勝利を収め、八代に迫ったが、7、8日の官軍の反撃によって八代に至ることができず、再び坂本付近まで押し戻された。4月11日、再び薩軍は八代を攻撃。疲労もあって官軍が一時敗退したが、13日に官軍に援軍が投入され、薩軍・官軍ともに引かず、4月17日までこの状態が続いた。17日、1個大隊に薩軍の右翼をつかせる作戦が成功して官軍が有利となり、薩軍は敗走した。この間の萩原堤での戦いのとき協同隊の宮崎八郎が戦死し、別府晋介が足に重傷を負った。

メモ欄



# 輸送手段としての球磨川

西郷さん、球磨川を下る

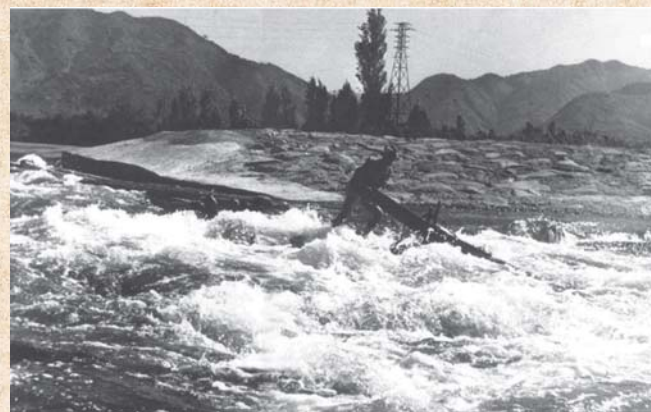
## 球磨川の水運の中心地坂本

人吉から乗船していますので、西郷軍は人吉の舟や舟頭・筏師を利用し、坂本の人たちは西郷軍と無関係でなかったのではないかと考える人がいるかもしれません。もちろん人吉の舟を西郷軍は利用しました。

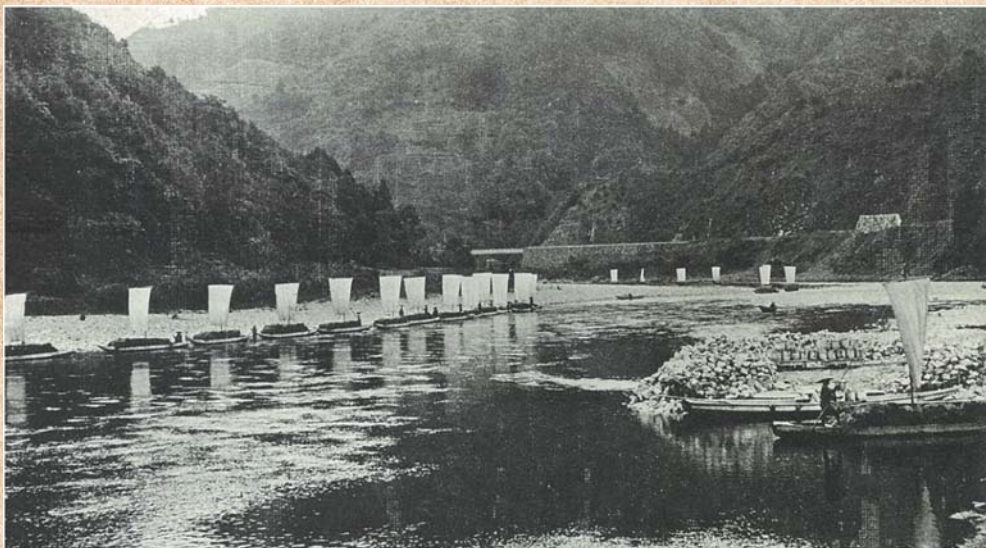
しかし、坂本の舟も利用されたにちがいありません。坂本の舟と舟頭さんは、江戸時代より前から自由に人吉と八代を往復していました。人吉の相良の殿様の参勤交代も手伝っていました。

手伝うというよりは、江戸時代の水運の中心地は坂本で

した。西郷軍の進軍にあたっては坂本は大きな役割を果たしたはずです。



メモ欄



球磨川の帆掛け舟



昭和13年頃の球磨川、萩原橋より上流を望む



# 西南戦争の激戦地・坂本

## 西郷さん、球磨川を下る

西郷軍は、明治政府軍に破れ敗走します。そのときにも、西郷軍の中心部隊は球磨川を利用しています。利用したというよりは、球磨川沿いに敗走しました。単純な敗走ではありませんでした。政府軍の猛攻撃を受けながらの退却で、球磨川流域は激戦地となりました。

激戦地といえば、熊本城をめぐる攻防や田原坂の戦いに脚光があつまっていますが、球磨川流域でも激しい戦闘がくりひろげられました。最大の激戦地は人吉市で、その傷跡は現在でも多数のこっぴえま

坂本も激戦地でした。特に、小川地区(巻末地図ろ)、坂本地区(巻末地図)では政府軍の攻撃が激

崇光寺：西郷軍拠点



しく、多数の犠牲者ができました。政府軍のスパイであると疑われて西郷軍に数日間にわたり拷問を受け、最後には虐殺された民間人もいました。

特に、坂本地区の崇光寺(巻末地図①)は西郷軍の拠点(野戦病院でもあった)で、戦死した西郷軍の兵士は同寺裏の竹林に埋葬されました。同寺も政府軍の攻撃により焼け落ちてしました。

その他、坂本内の各地に西南戦争にまつわる話が伝わっています。歴史ファンにとつて坂本は格好の場所です。西南戦争とは関係ありませんが、戦国時代、敵の攻撃を受けた瀬高城をめぐる物語(城の女性たちが球磨川に身を投げた悲話：巻末地図② ※わくわく体験手帖参照)や、天草

カネツケ岩



小川地区：激戦地



早水地区：隠れ念仏の里



の鰐口が坂本(大門地区：巻末地図②)に残された物語(人吉の相良家は天草にも進出していたのでした)も残っています。

メモ欄



# そして近代化へ

## 「坂本は豊かな村だった」

### エネルギー源としての山

#### 「坂本は禿山だった」

昭和三十年代半ばまで、薪や炭は家庭生活で大切な役割をはたしていました。生活必需品であったといつてもいいと思います。ご飯を炊いたり、お風呂をわかすためには薪・炭が不可欠でした。電気・ガスは工場で使用されていましたが、家庭までは十分に普及していませんでした。

電化製品にかこまれている現代からみると遠い昔話のようにみえますが、長い歴史からみますと電気時代の最近の話です。

旧八代市は平野(埋立地)です。山林はありません。それで坂本の

薪はよく売れました。石油の産地国が力をもっているように、山をもっていることは強みでした。昔の写真を見ますと、禿山が目立ちます。薪・炭用として山林が利用されたからです。これは、全国でみられました。日本は、禿山だからでした。日本の風景は、その点でも、以前とはちがっています。

江戸時代の記録をみますと、薪の窃盗事件が目立ちます。それほどまでに、重要でした。山林を無計画に伐採しますと、山は枯れてしまいます。そこで山林管理は厳重でした。山を十二等分に区分けして、計画的に伐採する方法がとられました。十二年もすれば、雑木はそだちます。

もちろん建築資材としても、山林は重要でした。立派な樹木は高値で

取引されていきました。多数の材木が筏に組まれ、下流に運ばれました。萩原地区(旧八代市萩原町)にはたぐさんの材木業者が集まりました。その面影は今でも残っています。



昭和11年頃、筏で運ばれた材木が並ぶ。



走水滝付近から見たさかもと。遠く八代海が見える。



一八三六年に描かれた萩原付近絵図



# そして近代化へ

## 「坂本は先進工業地帯だった」

### 西南戦争から近代化へ

#### 「製紙工場」

明治維新は機械制工場の建設を促しました。しかし熊本県は、指導者の派閥争いが激しく、工場は建設できませんでした。西郷軍に味方した熊本県人は少なくありませんでしたので、西南戦争の影響もあつたかもしれません。

熊本県で最初の工場は坂本(巻末地図①)にできました(明治二十八年末に会社設立、明治三十一年操業開始)。日清戦争で派閥争いがなくなつたことによると説明されています。

球磨川の支流・油谷川の落差を利用して水力発電をできること、

水がきれいで工業用水に適していることが工場の適地として選択された理由でした。「肥後紗紙株式会社」が当初の会社名で、その後、「東肥製紙株式会社」、「九州製紙株式会社」などと名前を変えていきます。現在の日本製紙株式会社の源流企業のひとつです(同社八代工場は、坂本工場の分工場として出発しています)。鉄道のない時代です。工場用資材は八代から舟で運ばれました。

同工場の鮎尾発電所(巻末地図③)の運転開始が坂本の点灯の第一号です(明治四十二年十月十三日)。その後、深水発電所(巻末地図④)など球磨川支流の水を利用した発電所が建設されます。大平発電所(巻末地図⑤)はその総仕上げといえます(昭和五十年営業運転開始)。製紙

工場はそれらの発電所を利用して操業をつづけましたが、昭和63年九月二十六日に閉鎖されました。最後の会社名は「西日本製紙株式会社」でした。工場跡地は、現在、公園になっています(ワイワイ・パーク：巻末地図⑥)。



深水発電所



油谷ダム



# そして近代化へ

## 坂本は先進工業地帯だった

### 西南戦争から近代化へ

#### 球磨川水運の終焉

「打撃の神様」と呼ばれた川上哲治さんは人吉出身ですが、川上家は明治四十一年の鉄道開通時まで葉木(巻末地図)にありました。鉄道輸送により家業の筏流しの仕事が急減したため、人吉に引っ越したのです。川上家はひとつの例で、鉄道開業により多くの舟頭さん、筏師さんは、職を失い八代や人吉に移住したのです。

また、電力の時代のはじまりを告げたのは荒瀬ダム建設でした。荒瀬ダム(巻末地図⑦)は昭和二十九年十二月二十五日に営業発電を開始します。その直前まで、筏師さんが球磨川を利用して材木を

運んでいました。

荒瀬ダム完成直後から自動車社会が到来します。球磨川を利用しての運送から自動車を利用した運送に時代は変わりました。

その荒瀬ダムも、撤去されることになり、いま、その工事が進められています。時代の急速な変化を感じます。

日本製紙株式会社は、バイオマス発電事業を開始する予定です。八代工場もその計画に入っています。坂本工場が水力発電を利用したのに対して、その分工場であった八代工場が発電事業を開始します。歴史はロマンにみちています。そう思いませんか。



右岸下流よりみた荒瀬ダム

## さかもと 探索地図

- ... 自然
- ... 神社・仏閣
- ... 産業遺産

